

# 変わる日本の「暮らし」と「まち」

最先端の産業で被災地の未来を切り拓く

福島県浪江町  
棚塩産業団地基盤整備事業  
(2018年・平成30年)

阿部民子

text by Tamiko Aoe



illustration: Shigeyuki Sakata

東日本大震災によって発生した東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で、町内全域に避難指示が出された福島県浪江町。2017年3月31日には、ようやく「帰還困難区域」を除く区域で避難指示が解除。6月に災害公営住宅への入居が開始されたのに続き、11月には地域伝統の「十日市」が地元開催された。震災から7年たった今年の4月には小中学校が開校。無人だったまちに、少しずつ人々の営みが戻りつつある。そんななか、4月15日に復興への新たな弾みをつける1つの起工式が行われた。場所は、沿岸部に位置する棚塩地区。ここに、最先端産業を誘致する大規模な産業団地が整備されるのだ。

式典には吉野正芳復興大臣を始め、約100人が出席。安全祈願の後、馬場有町長が「棚塩産業団地は復興の大きなシンボル。これらの拠点を核としたまちづくりを推し進め、必ずや浪江の復興を成し遂げたい」とあいさつ。整備事業を受託したUR理事長の中島正弘は「浪江町のにぎわいが戻るよ

の新たな弾みをつける1つの起工式が行われた。場所は、沿岸部に位置する棚塩地区。ここに、最先端産業を誘致する大規模な産業団地が整備されるのだ。

式典には吉野正芳復興大臣を始め、約100人が出席。安全祈願の後、馬場有町長が「棚塩産業団地は復興の大きなシンボル。これらの拠点を核としたまちづくりを推し進め、必ずや浪江の復興を成し遂げたい」とあいさつ。整備事業を受託したUR理事長の中島正弘は「浪江町のにぎわいが戻るよ

う、培ったノウハウと持てる能力すべてを発揮して取り組みたい」

と抱負を述べた。吉野復興大臣も「棚塩産業団地は福島復興の切り



福島イノベーション・コースト構想の一翼を担う

札。浜通りをロボット産業や新エネルギー産業の日本一の拠点とする気持ちで取り組む」と祝辞。関係者らが美しく盛られた土に鉄入れをすると、会場は静かな熱気で満たされた。

## 失われた産業回復の切り札に

浪江町などでは、現在、東日本大震災及び原子力災害で失われた産業を回復するための国家プロジェクト、「福島・国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想」が進行中だ。エネルギー関連やロボット開発、農林水産などの新たな産業基盤を構築し、産業集積や人材育成、交流人口の拡大が見込まれている。

今回起工式が行われた棚塩産業団地も、福島イノベーション・コースト構想の一環だ。約49ヘクタールの敷地に建てられる施設の1つが、世界最大級の水素製造拠点で、次世代クリーンエネルギーとして期待される水素を太陽光発電によって製造する。2020年の東京オリンピック・パラリンピックで、選手村や大会車両のエネルギー源としての活用を目指し、7

## 土地と道、まちを「気」で作る

月の着工が予定されている。もう1つの大きな核が、2019年開所予定の無人航空機（ドローン）滑走路と付属格納庫だ。産業用ロボットの研究開発、実証試験、操縦訓練などを行う福島ロボットテストフィールドに関連した施設で、無人航空機の飛行訓練や操縦訓練などを実施。13キロ離れた南相馬市の滑走路との間で長距離や広域の飛行訓練も行う計画になっている。

この棚塩産業団地基盤整備事業の任を担うのが、URだ。東日本大震災の津波被災地では多くの震災復興事業を担当。原子力災害被災地域でも、復興まちづくりを支援している。浪江町とは、2016年に復興まちづくりの推進に関する覚書を交換。国・県・町・各事業者から出される様々な要望を受けて計画を立案し、棚塩産業団地の設計を行ったほか、URが行う造成工事や道路などのインフラ工事と、立地企業が行う建設工事などが同時進行できるように、関係者と緊密な調整を図ることも、

URの重要な任務だ。

業務を遂行するUR浪江復興支援事務所のメンバーは4名。所長の塩間学は、今回の工事の特殊性を説明する。

「町と覚書を交わしてからわずか1年余り。その間、計画の策定から各種手続きまで、スピーディに行ってきた。造成着手前から立地する施設が決まっている区画も多く、開設の時期も決まっています。通常のように道路などを仕上げてから建物の建築を始めては、とてもスケジュールが間に合いません。ここでは道路やインフラを整備しながら同時に各事業者が建物を造っていく必要があります。こうした複数の工事が、支障なく円滑に進行するよう調整をするのもURの仕事です。多分、ここまで短期間に同時並行して行う工事は、URでも珍しいのではないのでしょうか」

国家プロジェクトとして注目度が高いなかで、いずれの施設も短期間での整備が求められているのが、20年春に予定されている施設完成に向けて、計画立案から技術的アドバイスまで、公平・中立的

な立場のURが半世紀以上にわたって積み重ねた、幅広い知見が生かされている。

塩間とともに業務に当たる中山誠も「いままでニュータウンの建設に携わってきて、まちの発展や移り変わりはずいぶん見えてきました。ニュータウン事業では5年や10年といった時間軸ですが、ここでは土地の造成だけでなく、建物完成も含めてわずか2年。これまでに培ってきたURの震災復興事業の経験とノウハウを総動員して、早期に施設が稼働できるように、インフラと施設の同時完成を目指して頑張ります」と語る。

「我々の行う造成工事は昔から変わりませんが、今回はその上に最先端の設備ができる。世界中から研究者や見学の方が訪れ、まちの活性化につながる。そういう仕事ができるのは、大きなやりがいです」と塩間。復興に向けて、浪江町の新たな一歩が踏み出された。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社